



Title	林語堂Moment in Peking翻訳出版をめぐる言説 : 日 中戦争期の文学場一面
Author(s)	松本, 和也
Citation	太宰治スタディーズ 別冊. 2015, 2, p. 10-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102893
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

林語堂 *Moment in Peking* 翻訳出版をめぐる言説

—— 日中戦争期の文学場一面

松 本 和 也

I

昭和一〇年代の文学研究を構想する時、中国という視点は欠かせないものの一つである。こと昭和十二年七月七日の盧溝橋事件以降、文学者の関心・行動、作品のモチーフ、受容モード（の変容）など、中国（日中戦争）という要素は、直接的・間接的にさまざまなかたちで文学（場）と切り結んでいく。^①

にもかかわらず、こうした問題領域は、その重要性にみあったかたちでは議論されてこなかった。たとえば、その文学活動期の大半が日中戦争期と重なる太宰治の場合、「清貧譚」（新潮）昭一六・一）や「竹青」（文藝）昭二〇・四）をとりあげた上での中国古典との比較検討は多々見受けられるものの、現代中国との関係となれば、『惜別』（昭二〇・九、朝日新聞社）を論じる際にかろうじて散見される程度にとどまる。^{②③}

そこで本稿では、日中戦争期の文学場における中国という要

素について考えるため、林語堂 (Lin Yutang 1895-1976) の小説 *Moment in Peking* (1939) に注目する。この時期の林語堂の邦訳（状況）については、河村昌子に次の指摘がある。

日中関係が緊迫し、開戦も間近であった当時、日本の言論界には、中国を知ることが日本人にとつての急務だとする考えがあった。そのような状況で、林語堂の著作は、中国および中国人の真実を客観的に説明した、信頼できる資料と見なされていた。^④

つまり、*Moment in Peking* は、小説であると同時に現代中国に関する概説書でもあったのだ。ただし、同書は在米中国人が中国現代史をモチーフとして書いたもので、それゆえ日本に対する批判的な記述も含み、多義的な意味作用を孕んでいた。

本稿のねらいは、日中開戦以前の中国への関心を素描した上

で(Ⅱ)、『*Moment in Peking*』の翻訳・出版状況およびパラテクストの検討を行い(Ⅲ)、翻訳書の受容をめぐる様相・言表を分析することで(Ⅳ)、日中戦争期の文学場における中国という要素について考えるための一視点を提示することにある。

Ⅱ

昭和一〇年代の文学場(の変動)という視座からみれば、中国(という要素)への関心は、日中開戦が大きな転機には違いないが、それ以前にも、魯迅などを中心にみられないわけではない。⁽³⁾むしろ、関心に供給(翻訳)が追いついていなかったというのが当時の実情であって、一戸務「支那文学の翻訳」〔書物展望〕昭一一・四)には、次のような指摘がみられる。

中華民国成立以来になつてから所謂新文学運動に活躍して現在の新生活運動——文芸復興期に至るまで、幾多諸種の文学運動を中心として数百人の新人作家が輩出し、それぞれに代表作を残してゐるが、現代作家として日本に紹介されてゐる文人は殆んど無いと云はれてもよい。僅かに魯迅一人ぐらゐがや、完全に紹介されてゐる程度である。

(三〇九頁)

同じ頃、中国文学の紹介に力を入れていた「文藝」誌上では、『日本の文壇』には、支那或は支那人を主題にした、乃至それに

触れた創作が乏しい気がする》(三七頁)という藤森成吉が「支那を描け!」(昭一一・六)で、次のように述べてもいた。

われわれが支那を書かなければならないといふことは、単に隣国だから、といふ理由からではない。現在、われわれに取つて支那は隣国以上のものである。その運命は、直接わが国の、われわれの運命に關してゐる。これほど密接な微妙な關係に立つてゐる国は、ここ数十年來外にあるまい。(三八頁)

日中開戦以前にあつても重要な『支那』について、しかも、『最も支那に近く住み、文字も同じ形象文字なら、皮膚も同じ色をして居り、過去の文化的闊歩もどこの国の人よりも深く持ちながら』(新居格「現代支那の題材性」、『文藝』昭一一・六、一〇四頁)、《現代支那を書いた小説を読まうとして一般人は日本の作家がこれを提供してくれないから、仕方なく魯迅やパール・バックを読》(小林秀雄「不安定な文壇人の知識 方法論偏重の破れ」、『読売新聞』昭一二・一二・三二、五面)まづるを得ないような状況がつづいていたのだ。⁽⁴⁾

そうした中、林語堂紹介のキー・パーソンの一人である新居格は、『*My Country and My People* (1935)』を邦訳前から「林語堂著 支那と支那の民衆『*My Country and My People*, by Lin Yutang』」〔学鑑〕昭一二・八)で紹介して

もいた。その際、新居は『今日我国は支那とトラブルをもつてゐる。それだけに、本書の如きは我々日本人にとつては必読の書』（二七頁）だと同書を位置づけていた。また、『我國民・我国土』（昭一三・七、豊文書院）を訳出した後にも、新居は「わが郷土」に就いて「文藝」昭一二・一一）で『支那の真相を暴露した支那を知るためには非常によき本』・『今日のわれわれには支那の真実を知る必要がある。その意味で本書の紹介が我国で時に必要だとも信じた』（二〇六頁）として、時局を関数とした同書的重要性を説いている。また、林語堂「わが郷土」と同時掲載の「林語堂」（「文藝」昭一二・一一）において、笠間果雄も次のようなかたちで林語堂の著作を重んじている。

多くの自称支那通の何度も蒸し返される支那論よりも、林氏やパール・バックの「大地」以下の三部作などが、実相支那を説いて、真髓を穿つてゐる。刻下此の必読の文章によつて、我國民の対支認識を深めるべきものと思ふ。

（一八四頁）

このように、日中開戦以降、局所的ながら『支那を知るため』に林語堂の著作が邦訳され、その重要性が強調されていく動きは明らかだが、他方ではその影響力ゆえに警戒されていく。『事変は勃発し、やうやく「林語堂」の名は支那を論ずるに当つての重要なもの、一つとなつた』という認識を示す阿部知

二は、「林語堂の「支那」（一）文才巧みな宣伝の成功」（『東京日日新聞』昭一三・九・二〇夕）において、『私は、いまその林語堂なる存在及び彼の言論に対して、われ／＼日本人は、いかなる態度をもつて臨むべきか』を考へるべきだと主張し、『われ／＼は、もつと拔差しならぬ立場で、彼の表現するところの「支那」に対処しなければならぬ』（五面）と、日本人読者への注意を促す。連載最終回の「林語堂の「支那」（三）日本はいかに見るべきか」（『東京日日新聞』昭一三・九・二三夕）で阿部は、次のように、林語堂を介して『支那』を考へる際の注意点を整理し、警告を発している。

もし支那が、全面的に彼のいふごとく、非政治的な悠々たる柔かな人間味に溢れた人々のみであつたならば、これはたゞ今の日本にとつて何と都合のいいことであらう。（略）……たゞ、その他に、もう一つの「支那」があるのだ。曰く、國民政府、共產党その他が造り上げんとした支那だ。この、新しく造り上げんとした支那——いま日本に抵抗してゐる、油断ならぬ支那——。これは林語堂の「支那論」でいへば、支那人の「本質」ではない筈である。（五面）

要するに、日中戦争下の時局にあつて、抗日という要素の有無が中国をめぐる重大な争点なのであり、その時、林語堂（の著作）が示すものは、日本の立場からすると両義的に映じるはず

で、ことによれば反日的プロバガンダにさえ読めるのだ。

事実、『林語堂は極めて端的に反日的』・『彼はわが国を理解しようとしないうし、わが国の主張に耳を傾けようとしないう』(一二三頁)という見方を示す「林語堂と新支那の誕生」(「セルパン」昭一四・五)の郷三之助は、次のように指摘していた。

即ち林語堂の称する近代化とは、取りもなほさず支那の新たに覚醒せられた民族意識を意味し、しかもこれは進歩と共に闘争を伴ふものであるといふ。／＼しかも注意すべきは、この支那の近代化とは、新たな支那民族意識の高揚を指すと同時に、もつと具体的に言へば抗日意識の高揚化を意味してゐるのである。「略」林語堂は、この支那の近代化、即ち抗日意識の高揚は決して蒋介石政権の煽動によるものでなく、むしろ外敵の圧迫により、自然発生的に民衆の間に醸成されたものだといふことを彼の見解の基本として述べ立ててゐる。ところが、この点は少し常識を備へた者なら、支那の抗日教育がいかに根強くまた執拗に行はれたかの事実と矛盾することを知つてゐるが、東洋の知識に迂遠な白人達は、林語堂のかうした見解の基本をそのまま信じ込んでしまふ恐れがある。(一二三・一二四頁)

つまり、アメリカで言論活動を展開する林語堂の著作は、日本国内では中国の実情を知るための概説書であると同時に、諸

外国からすれば、中国の立場からみた日中戦争の入門書であり、その際、そこに書かれた日本(像)が、日本に好都合なたちで読みとられていくとは限らないのだ。こうした林語堂の著作が孕む(日本側からみた)多義性は、*Moment in Peking*の訳出・刊行においても、当然重要な争点とされていく。

III

昭和一五年に三社より翻訳出版された*Moment in Peking*原著は、昭和一四年一月一六日、リチャード・J・ウォルシュ(パール・バックの夫)が経営するジョン・デウ出版社から刊行された。本節では、邦訳書の、書物としての性格を検証していくが、まずは*Moment in Peking*の概要を確認しておく。

本書の内容は、いまから数えれば約五十年前の一九〇〇年夏、すなわち義和団事件の時をスタートとして四十年間にわたる新中国の動乱期を歴史的背景として描き出されているが、この遠景をなすものは悠久の昔にさかのぼる中国民族の生活史であり、人生哲学である。義和団の乱、戊戌政変、辛亥革命、五四運動、国民革命、東北事変(満洲事変)、全面抗戦などの歴史上の事実が作中に登場する多数人物の上に投影され、四十年間に現れた有名人物の思想と活動を、波瀾を極めた歴史の変貌の中に、驚くべき鮮かさをもつて描き出していることは、さすが中国が世界に誇

る最大の叡知たる巨匠の貫録である。そしてこれは作者の偉大なる企図と理想とを、非常な情熱をもつて表現した不朽の名作である。⁽⁷⁾

こつした *Moment in Peking* は、以下のように翻訳出版された。

***今日の問題社版**

鶴田知也訳『北京の日 上巻(道教の娘たち)』

(昭一五・一、全四三〇頁)

鶴田知也訳『北京の日 下巻(庭の悲劇/秋の歌)』

(昭一五・二、全五〇三頁)

***四季書房版**

小田嶽夫・庄野満雄訳『北京好日 第一部道家の娘たち』

(昭一五・三、全四二三頁)

小田嶽夫監修・中村雅男訳『北京好日 第二部庭の悲劇』

(昭一五・九、全三九九頁)

小田嶽夫監修・松本正雄訳『北京好日 第三部秋の歌』

(昭一五・九、全三六〇頁)

***明窓社版**

藤原邦夫訳『物語 北京歴日』(昭一五・七、全二〇八頁)

いずれも、一応は全三部をカバーした内容であるにもかかわらず、邦訳後の分量(頁数)には大きなひらきがある。これは、

後述する版元・訳者による削除問題とも関わる。

第一に刊行されたのは今日の問題社による、二冊本の『北京の日』である。まず、下巻に付された巻末広告文を引いておく。

天才林語堂が次期ノーベル賞獲得を目ざした世紀的世界文学の圧巻! 堂々二千枚に達する大長篇の日本語への訳出は、四ヶ月に亙る訳者鶴田知也氏の苦心によつて、いよゝ完成! 第三回芥川賞の鶴田氏が心血を傾注した流麗なる訳文は、原作者と同郷の立教大学講師陳文彬氏の厳密なる考証と相俟つて、他の追隨を絶対に許さぬ完全なる邦訳として、原作の価値をいよゝ高めた! 支那を知る小説として、支那の民族性を理解する社会小説、支那の伝統を知る歴史小説として、日本読書界を感激の坩堝の中に投ぜずには置かないものがある!

訳者である鶴田知也は、上巻に付した「訳者の言葉」で、『北京の日』には、内側から、中国人自身が、赤裸々に描いた中国がある! /そこには、『我が闘争』、『我が国民』の名著を書いた作者の、博識と造詣とによつて、中国の人情・風俗・習慣・風土・歴史・宗教・哲学等々の真実の像が示されてゐる(二頁)とその内容をまとめた上で、同書を『二千六百年々頭に、あらゆる意味に於いて、我々に意義ある作品(三頁)』と意味づけている。また、下巻に附された「完訳に附して」で鶴田は、次の

ように、本書が果たし得る意味作用に言及している。

されば、この傾向の打破については、幾度か賢明な批評家諸氏の指摘し要請したところで、有能な作家の幾人かは已にその方向に進みつ上あるのである。『北京の旦』は、こゝを以つてわが国の文学界に大きな示唆を与へるものと私は確信する。(二頁)

こゝにいう『傾向』とは、*Moment in Peking* を抗日の書と見做して排そうとする動きのことで、鶴田はそうした見方があることを一度提示した上で、再批判を展開したことになる。

総じて、『北京の旦』は、他ならぬ現在の時局下における中国理解のための重要な書物、概説書と位置づけられ、そのことによって文学作品としての価値も擁した作品とされていた。

第二に刊行されたのは、四季書房による三冊本の『北京好日』である。まず、各巻に付された巻末広告文を引いておく。

今ここに小社上梓するところの『北京好日』は、悠久五千年の支那民族史を、北京の新しき四十年の中に表現せんとした林語堂の野心作であり、近代の男性と女性がどんなふうにな成長し、又相互に生き合ふことを学ぶか、人はいかにして愛し憎み、争ひ有し、楽しみ且つ苦しむか、如何にして或種の生活の習癖と思考の様式とが作られるか――

人争ひ神しろし召す人生のすがたをば、彼は「彼の国土と彼の国民」の中から探し求めようとする。それは、げに彼が副題した如く、「近代支那生活の小説」として、世界文学の中に聳立する不滅の一大金字塔であり、またここにこそ私達は同じき東洋人として「我国土・我国民」をば新しく発見するであらう。

ここでは、作品概要とあわせて、『同じき東洋人』たる林語堂との日本人読者の近さが強調されている。第一部に付された「訳者序」で小田嶽夫が、同書について《世相を巧みに写した小説》・《支那生活の書》・《人生の書》・《宇宙の書》のいずれをも兼ね備えた作品であることを以て《近代の最も東洋的な大長篇小説》(二頁)と位置づけていることも符合する。

第二部に付された「序」で、『フィクションではあり得ても、到底ノヴェルと呼ぶことは出来ない』と『北京好日』を評する中村雅男は《我々がこの小説に期待できるのは、寧ろ比較的にリアルな書き方で現代の支那、または支那人を見せて呉れる点》だとした上で、『われわれ支那に関する素人を啓蒙して呉れる最も良い入門書』(三・四頁)だと位置づけている。

第三部に付された「序に代へて」で松本正雄は、『この小説の第三部が、日支事変を背景としてゐるからと言つて、これを実際物視することは避けなければならない』(二頁)と、問題含みの争点に積極的言及しつつ同書の位置づけを提示していく。

《仮りにそれが反日的な意図のもとに書かれたものとしても、どうしてその訳出を訳出として貶しめることが出来よう》と訳者の立場を示しつつ、次のように同書の意義を説いていく。

支那と戦ふにせよ、これと提携するにせよ、その国の人々の思想、感情を学ぶことは決して無用のことではない。就中、その国の人々が日本に関していかなる考へを持つてゐるか、事変に対してどんな風に感じてゐるかを知ること、はむしろ喫緊のことではなければならない。林語堂のこの小説が、たとえ最初の一行から最後の一句に到るまで、日本に対する反感に満ちてゐるにしても、われわれはこれを熟読玩味しなければならないのではあるまいか。汎んや「北京好日」一篇が、ただなる反日文章ではなく、支那の近世の歴史を背景として、支那人の近代文明に対する態度や、新生活に対する情感や、若い世代の混沌とした中にも澁刺としたもののある生きた姿を描いたものとして、われわれの学び取るべきところの決して少なくない一種の「文獻」であるに於いてをやである。(二・三頁)

してみれば、『北京好日』もまた、他ならぬ現在の時局下における中国理解のための重要な『文獻』であり、そこに孕まれた政治的イシューの危険性(多義性)も含めて、訳出・公刊する當為自体に積極的な意義がこめられた書物なのだ。

第三に刊行されたのは『物語 北京歴日』⁸⁾、*Moment in Peking* のダイジェスト版である。それゆえか、藤原邦夫による「序」には、本書の意義が簡潔かつ集約的にまとめられている。

友邦としての支那を知悉すること極めて剋切なる今日、この東洋人の手に成る文学的傑作が広く日本の読書界に迎へられて、こゝに暖かき理解と多くの示唆との汲み取られんことを、筆者は心から希望するものである。(四頁)

総じて、『北京の旦』、『北京好日』とも共通する *Moment in Peking* (邦訳) にこめられた意味とは、右に言及された①現在の時局下における中国理解のための情報源、②東洋人による中国表象、③文学的価値、の三点にまとめることができる。ここに、④読み手の解釈に委ねられた、日中戦争に関わる林語堂のスタンスがかけあわされることで、*Moment in Peking* 及びその三種の翻訳書は、昭和一五年において問題となったのだ。

こうした、邦訳された *Moment in Peking* に通底するパラテクストによる同書の意味づけ・受容の方向づけを確認した上で、日中戦争に関わる翻訳の問題についても検討しておきたい。

というのも、日中戦争下に翻訳出版された *Moment in Peking* は、『いずれも、日本側に都合の悪いところは省略されており、戦後、佐藤亮一訳による『北京好日』上下二巻(一九五〇・九、ジープ社)によって完訳出版された』という事情があるからだ。

しかもそれは、時局柄、日本に都合の悪い箇所が省略されたという程度にとどまるものではなく、竹内好にいわせれば『戦争中に出た翻訳はどれも、ひどい削除で骨抜きになっている』のだ。その上で、竹内は同書について次のように述べている。

この小説は、至極退屈だが、現代史の資料としては日本国民が必読する価値がある。ここに曝露されている日本の侵略の野蛮さ（とくに密輸と麻薬）は、もしも東京裁判がなければ、今でも私はその真偽を疑うかもしれない。

戦後、このように指摘される翻訳状況について、しかし昭和一五年当時の文学場において自明なわけでは決していない。三種の翻訳書に付された、パラテキストの関連箇所をみておこう。『北京の日 下巻』に付された鶴田知也「完訳に附して」には、次のような翻訳方針および削除に関する記述がみられる。

訳文は、平明・流麗な原文の風韻を伝へ、出来る限りは、それに忠実であらうとしたが、作者が、紅毛読者のために、われ／＼には不必要な説明を試みた所、余りに冗長であったり、何かと面白くなかったりする部分数箇所を、私の信ずる所に従つて、削除した。題材が題材だけに、原作を傷けない程度に、細心の注意を払つたのは、時節柄、当然の処置だと考へる。（二頁）

ここでは、原文に『忠実』という原則が立てられながら、『何かと面白くなかったりする部分数箇所』が、『私の信ずる所』によつて削除され、しかもそれが『時節柄』として正当化される。もちろん、これは当時の時局・文学場による目にみえない圧力ともとれるが、今日においては、『日本政府に不名誉と思われるような描写をそのまま訳してはいない』・『訳者によつて驚くべき削除や歪曲が行われた』と厳しく批判される。

つづいて、『北京好日』について検証していく。第二部に、次に引く四季書房「本書の題名について」が配されている。

本書の上梓に当つて、一字一句も忽せにせず、真に文字通り彫身鏤骨の良心的な仕事をされた訳者御一同に深甚な敬意と感謝を捧げたい。出版戦国時代の今日に於て、弊社も亦営業上の制約から十二分の時間をもつことの出来なかつたのは心残りである。翻訳上多少不備な点については弊社にもその責の一半がなければならぬ。（二・三頁）

ここでは、訳者への謝辞と、時間の制約による『翻訳上多少不備な点』を自社の責任と認めつつ、『完訳といふ言葉の許される範囲に於ては、この書を完訳として世に送るに躊躇するものではない』という。同じく第二部に「序」を寄せた訳者の中村雅男も、『御協力を賜つた諸氏（小野忍氏・陳文彬氏／引用者注）の他に、出版者側の異常に良心的な準備を得て、少くとも

訳者自身としては不可解な箇所、もしくは調査洩れ等は殆ど全部解決した》(四・五頁)と、出版社の姿勢と併せて翻訳の完成度を誇っている。

ただし、第三部になると歯切れは悪くなる。第三部に付された、松本正雄「序に代へて」には次の一節が読まれる。

なほ、本巻は前述のやうに、その後半に於いて日支事變勃発後の生々しい事実を背景としてゐる。従つて現在まだ發表を差控へなければならぬやうな箇所が少なくなかつた。削除は、文字通り避けられるだけは避けた積りであるが、どうしても削除しなければならぬ場合にも、その決定までには相當の配慮と用意とが払はれたのである。この面倒な仕事は全部八重樫昊、大島辰雄両氏が引受けて下さつたのである。(三頁)

(一)では *Moment in Peking* の記述を、当時の時局・文学場との關係上、やむをえず《削除》したことが、《面倒な仕事》としてその担当者名と併せて言明されている。してみれば、書肆が打ちだした《完訳》は割り引いて把握する必要がある。

また、同書各卷には新居格による林語堂紹介文が付されている。第一部に付された「林語堂——人及び思想」には、林語堂の思想が《共產主義でもなく、反動でもない。そしてその中庸をゆく思想、物の見方はリベラルで、支那の政治に対する失望

から古い支那に固有の自然發生的なアナキズムにさへ思惟的には傾倒するところがあつた》と紹介された上で、《彼は今の抗日青年達にどれだけ受けてゐるものか、それは分らぬ。むしろ受けてはゐないと見て事実》、なぜなら林語堂は《コムミュニストではないから》(四・三頁)と言及されてもいる。

第二部に付された「林語堂——その中庸性について」でも、新居は《彼の思想の中庸性とは、すべての支那思想に対しての中庸性であり、欧米の凡ゆるイズムに対するも同様である》(二・九七頁)と述べて、林語堂の政治信条の基底を《中庸性》に置く。第三部に付された「林語堂と支那の良識」で、《林語堂の抗日性を強調した一部の人々は、彼が同時に共存共栄の基礎に立つ日支提携の時代を尤もだとも考へるといつてゐることに留意しなければならぬ》(二・九一・二・九二頁)と注意を促す新居格は、その上での林語堂の重要性を改めて説いていく。

今日われわれの責務は、如何に逞ましい日支の平和を構築するかにある。それには土台の基礎工事に重きを置かねばならぬ。〔略〕さらに支那の良識をよく知得する必要がある。その意味で林語堂の著述は参考書になるものといへる。(二・九四・二・九五頁)

総じて、『北京好日』とは、日中戦争に関わる第三部の削除を認めつつも《完訳》を掲げられ、新居格の一連の文章によつて

も林語堂を政治的に脱色することで、純粹に中国理解のための重要書であることを積極的に打ちだした書物だといえる。

こうした『北京好日』について、今日では《原作にある日本軍の暴行や日本の侵略について、鶴田訳では削除が大量になされているが、『北京好日』の場合は鶴田田訳より削除箇所が少なく、しかもその削除箇所が本文中に指示されている》点が相対的に評価されるものの、《原作を大きく歪曲している》点については、『北京の日』同様に厳しく批判されている。

最後に、『物語 北京歴日』についてもみておくならば、藤原邦夫「序」には、次のような一節がみとれる。

元来、この小説は欧米人を対象として英文で書かれた関係上、我々には無用と思はれる故事や熟語に対して、可なり冗長な註釈めいた説明が附け加へられてある。筆者は、適宜これを省略することによつて、一層この作品の小説的魅力と構成を緊密ならしめようと腐心した。(四頁)

つまりは、筆者の判断によつて、『小説的魅力と構成』を第一としつつ、併せて『省略』も行つたことが言明されている。

以上、*Moment in Peking* 邦訳に付された各種パラテキストは、邦訳書のいずれもが、原則として原文を尊重した訳出であること、現在の時局下において、中国をよりよく理解するために重要な概説書であること、を積極的に意味づけていた。同時に、

著者・林語堂が（日本の国益に反する）政治的危険人物ではないこともまた、パラテキストが示す邦訳書の性格であつた。

IV

昭和一五年、たとえば『日本人が中国の実相を知り、中国人が日本の実相を知ることの必要が、現在ほどさし迫つたことはない』という認識を示す「支那研究書随想」（「改造」昭一五・五）の平野義太郎は、『日本人が日本の社会的発展を知ることの必要と同様に、中国人の社会の真相を知り悉さねばならぬ中国研究は、緊急である』と、中国理解の緊急性を説いていた。

こうした時期、*Moment in Peking* にいち早く注目したのは中野好夫である。原文（英語）で同書を読んだ中野は、「文学と宣伝その他（文芸時評）」（「文藝」昭一五・二）において、『これ（*Moment in Peking*／引用者注）はおよそ最も巧みになされた、或はもつと適切にいへば、一見最も宣伝文学らしくない宣伝文学乃至国策文学』だと捉え、次のように述べている。

僕は殊に今次事変以後の部分である百頁ばかりを精読してみたのだが、これはある意味で小説の形をかりた、アメリカ人に対する支那側の今次事変解説書だといふことが出来る。つまり作者は物語の運びの合間合間には実に平易な、そして説得的な事変解説を与へるのである。（略）解説は無論日本への誹謗に充ちたものだ。しかも極めて身勝手だ。

(一四一頁)

その上で、中野は《内容の性質上わが国に訳出は困難だらう》という予測を示しつつ、《もしこの作品などが向ふでベストセラーにでもなつた場合（予想されなくはないのだ）、その暗黙の影響力を考へると實際不快を禁じ得ない》（一四一頁）と警戒を露わにしていた。前後して *Moment in Peking* の翻訳出版ラッシュがはじまったことをうけて、中野は再び筆を執る。

《今の出版現状、殊に翻訳書の無統制振り》を《醜態》、《翻訳小説の乱立時代》（二三一頁）と評して現状を嘆く「文学と政治その他（文芸時評）」（「文藝」昭一五・三）の中野は、*Moment in Peking* にふれて《あんなものを三つも出す気になる心理も諒解に苦しむ》として、次のようににつづける。

もし原作そのまゝで出るものならばまだ多少逆説的な意味もある（それは冒号に書いた。だがいづれ最後の最も興味ある部分はズタズタに切られることはわかつてゐると思ふ。〔略〕それにもつとも癪に障るのは広告の悪どさと無定見さである。まるで鬼の首でもとつたやうにアメリカでは出版一週間で何十万部とかを売り尽したといふ。〔略〕明らかに作者林語堂が支那の弁護のために、そしてアメリカ一般市民の同情を護るために、そして日本をたゞ悪い者にして平易に解説したもの以外ならないのだ。〔略〕それをその

ま、日本へ持つて来る滑稽さに至つてはお膳の方が茶を沸すだけだ。（二三一・二三三頁）

さらに、《こんな不心得な出版書肆や翻訳者は監獄へでも打ちこんで置いたらいいだらう》とまで語気を荒げた中野は、それゆえ *Moment in Peking* 翻訳をめぐる言表を喚起していく。

《三種出るとやらの「北京の日」が先づ二種現はれた」とする無署名「五行言」（「文藝」昭一五・五）では、《先月、これを「排日の書」と烙印を捺し、この書の翻訳者と出版者とを監獄にぶち込むべし、と怒号する文章が本誌に掲載された》ことにふれて、次のような揶揄が囁かれもする。

だのに、一向おかまひもなく、右の書は発売され、広告によると版を重ねさへしてゐる。ことによると、あの怒号が売行のお手伝をしてゐるかも知れず、怒号者たる私設検閲官の面目も權威も丸つぶれといふわけだ。（二〇二頁）

こうした「ゴシップにとどまらず、「日本文藝新聞」紙上⁽¹³⁾では、「林語堂の小説 翻訳問題異変」（昭一五・三・一〇、二面）という特集が組まれる。直接《監獄》（中野好夫）という言葉にさしむけられた G S T 「誰が監獄に入るべきか」をはじめ、出版社・翻訳者による反論が並ぶ。小田獄夫は「林語堂は『偶然性』の作家」で、《偶然性が多い》という技巧（のみ）を論

じているが、残りの記事は中野論への直接的な反論である。

四季書房「林語堂は排日的ではない」は、『全体的に見れば決して排日的ではない』とした上で、次のようにつづく。

しかも、林語堂はイデオロギストではない。多分にヒューマニスティックな眼から見てゐる。宿命的悲劇を通じて、新しい中国の歴史が生れてくる、さういつたところにこの小説の価値を見るべきで、功利性からみることは間違つてゐる。／また、中野氏のいふやうに、決して卑俗な小説ではなく、頗る立派な作品で、中国民衆の生活を知る上にも、むしろ凡百の著作にまさると思ふ。

また、『北京の日』は、私にいはせれば決して、抗日的作品ではありません』という「中野氏の時評は奇怪千万なり」の伊藤隆文も、次のように『北京の日』を擁護していく。

真の中国民衆の生活を描き得た点では、至極公平な立場からなされたやうにさへ思はれます。また翻訳者にも、美しく優れた一個の文芸作品として、翻訳を果された訳で、この点に対してとや角の非難は当を得ないことに思はれます。

このように、『*Moment in Peking*』を公刊した側の書肆・訳者は、その文学性、実用性を主張して、中野への反批判をくわえてい

くが、翻訳ラッシュに問題がなかったわけでもない。同紙に掲載された広告「北京好日 四季書房刊」(『日本学藝新聞』昭一五・一一・一〇)には、次のような事情が記されている。

▽尚この春刊行の四季書房はこの書の翻訳を最初に発表し、訳名を『北京の日』として新聞諸雑誌に発表したるに拘はらず、出版問題になり、『今日の問題社』より特許申請中云々の横槍を入れられ、止むなく『北京好日』と解題して発表したものであるが、今日の問題社発行の『北京の日』はその翻訳が拙速主義のために省略多く、原文を歪曲した個所が不評の的となり、夙に不良出版として出版会識者の指弾をうけ絶版を宣言するに到つた。／またこの書は、その内容が中国的現実の如実な描写故に抗日書なるの中傷も見出されたが、林語堂の思想そのものが極めて中和的なものであり且つこの書のなかにある中国現実の諸種はわが国民の対支認識を深める点で重要な役割を果すものであるといふ点で、単純な中傷の声は夙に消失した。かやうな意味で出版界の問題の書の一つである。(一六面)

いずれにせよ、『*Moment in Peking*』が時事性・即時性を要点とした、日中戦争期の日本において多義的な意味を孕んだ問題含みの書物であることは疑いなく、まさに『問題の書』であった。ならば、同書は文学場においてどのように読まれたのか。

このことを考えるための同時代評として、徳田秋聲・久保田万太郎・正宗白鳥・廣津和郎・里見淳・宇野浩二「文学雑談」〔改造〕昭一五・六に、次のやりとりがみられる。

里見 「北京の日」といふのはどうなんです。(宇野氏に)

君、読まない？

正宗 あれは全然詰らない。

正宗 それは支那の事を解るにはいい。支那の生活を——さうしてそれは相当上手でせうけれど、しかし、本當に傑れた芸術を自国語で書かないで、外国語で書くこととはないと思ふな、あの人が。(三八四頁)

ここから判断する限り、『北京の日』は文壇の大家たちの関心をひかなかつたようである。芸術性を否認された上で、中国理解のための書としてのみ、一定の評価がなされている。

また、大正期に中国への深い関心を示した谷崎潤一郎は、後年のエッセイ「きのふけふ」(『文藝春秋』昭一七・九)で、『兎に角われく』は、——殊に文学に携はつてゐる者は、——支那の現代文学とは如何なるものか、支那現代の一般読者層はどう云ふ物を読んでゐるのか、等々のことにつき、もつとく好奇心を持つやうになつてもよい(14)という見解を示しつつ、鶴田知也訳『北京の日』に論及する。『北京の日』を評して谷崎は、『光緒年代から現代に互る約四十年間の北京生活を描いた一種

の紅樓夢であつて、それ以上の何物でもない』(一八九頁)というが、その具体的な内実については、次のように論じている。

此の小説に扱はれてゐる四十年間と云ふものは、その間に北清事変、日露戦争、第一次世界戦争、満洲事変、支那事変等々の大事件があり、国内では辛亥革命に依つて清朝が覆滅して以来相次ぐ内乱と督軍の割拠時代を経て蒋介石の中央集権に至ると云ふ、支那としては容易ならぬ大変動の時代でありながら、此処に描かれてゐる世界及びそこに登場する人物は、不思議にそれらの変動とは大した関係はないもの、如くである。(一九〇頁)

総じて、*Moment in Peking* について、同時代の中野好夫のよう(15)に積極的に問題化した形跡は、管見の限りみられない。してみれば、言表化された限りにおいて *Moment in Peking* は、原著の読者や版元が危惧したかたち読まれることはなく、中国理解の概説書にして話題の一書として、受容されたとみられる。

†

以上の検証から、*Moment in Peking* (邦訳)が日本の文学場に投げかけた、中国という要素を考える際の課題についてまとめて、展望にかえたい(書肆の特性、バストセラーを支えた読者層やその具体的な受容については、他日を期したい)。

第一に、*Moment in Peking* について、一部には英語原著を読

み、全文の内容を知ってる人がいたという事実がある。つまり、その全貌について、アクセス自体が封じられていたわけではなかったし、同書の内容についての言明も公開されていた。

くわえて第二に、著者である林語堂も含め、日中戦争が描かれた *Moment in Peking* (第三部) が、日本の時局下において問題含みの作品であることを、関係者たちは知悉していた。

にもかかわらず、第三に、訳出・出版時の大幅な原文の削除、および、書物に付されたパラテキストによって、原著に孕まれた政治性は脱色され、中国理解の概説書として *Moment in Peking* の三種の訳書は刊行された(翻訳というより、別の書物がつくられた、といった方が現状に即していると言えいえる)。

第四に、それゆえ、日本の文学場において *Moment in Peking* は、無害な現代版『紅樓夢』として(のみ)受容され、中国理解を深めるための話題の翻訳書として現象することになった。

最後に、三社からの競合翻訳・出版が問題にされたほどには、その内容や右の第二、第四に関わる争点が議論されることはなく、中国の現実については、結局のところ、新聞報道や文学者による報告文学^{ルポ文学}がその情報源とされる状況がづづいていく。

つまり、《翻訳の基本的な役割》が《可能性を開くこと》⁽¹⁵⁾であるならば、*Moment in Peking* をめぐって生じた事態は、それに文字通り逆行する、可能性を閉ざすことであつたといえる。今回検証したケースは、中国という要素が時局下の文学場に介入しようとする時、同時代受容の地平・モードがどのように

作動するかを示したものであると同時に、この事例を通じて文学場もまたその規則を整理していっただろう。日中戦争下の文学場において、中国と向きあうということは、少なくともこの程度には困難なことなのであり、同時代の文学(活動)は、こうした視点を考慮して考えていく必要があるはずだ。

注(1) 拙論「川端康成「高原」連作の同時代受容分析」(『国語と国文学』平二七・四) 他参照。

(2) 《「中国」をめぐる批評的言説は、その批評性の核心において、どれほどまことに批評的であつただろうか》(一〇一頁)と問う、山崎正純「『中国』を迂回する日本の近代」(同『戦後』在日文学論 アジア論批評の射程』平一五・二、洋々社)に示唆を受けた。

(3) 尾崎秀樹「大東亜共同宣言」と二つの作品——「女の一生」と「惜別」(『文学』昭三六・八)、川村湊「惜別」論——「大東亜の親和」の幻(『国文学』平三・四)、山崎正純「太宰治と中国——「惜別」を中心に」(『国文学』平一・六)。

(4) 河村昌子「戦時下日本における林語堂の邦訳」(『千葉商大紀要』平一九・一二、五八頁)。

(5) 飯田吉郎「現代中国文学の紹介について——プロレタリア文学者より見た——」(『東洋大学紀要』昭三三・二)、拙論「昭和一〇年代における魯迅受容一面——佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫——」(『立教大学日本文学』平二二・七)参照。

(6) パール・バック『大地』に関して、足立節子「パール・バ

- ツク『大地』が形成した中国観——一九三〇年代のアメリカと日本の対比——」(『比較文学研究』平一〇・二) 参照。
- (7) 佐藤亮一「訳者のことば」(林語堂／佐藤亮一訳『北京好日上巻』昭二五・九、ジブ社)、一頁。併せて、魚返善雄「林語堂『北京好日』」(『国文学』昭二六・九)、高畑常信「中国の旧社会を描いた林語堂『北京好日』の構成」(『徳島文理大学比較文化研究所年報』平二三・三) も参照。
- (8) 石崎等「越境の報道学——「日支事変」と従軍作家たち(Ⅰ)」(『立教大学大学院日本文学論叢』平一七・一一)、三一頁。
- (9) 竹内好「佐藤亮一訳『北京好日』」(『図書新聞』昭二五・九・二〇／引用は『竹内好全集 第三巻』昭五六・三、筑摩書房)、一七八頁。
- (10) 崔海燕「谷崎潤一郎の読んだ林語堂の Moment in Peking」(『比較文学』平二二)、五三頁。
- (11) 注(10)に同じ、五八頁。
- (12) 後になっても、中野好夫は「出版文化の育成」(『中央公論』昭一七・六)で、『原書は歴然たる排日小説を、なんと勝手に親日小説に改変してまで、国辱的広告に血道を上げるのだから、実際なんとも挨拶の言葉もなかった』(一二二頁)と、当時の翻訳状況を批判している。
- (13) 同紙に掲載された広告「林語堂著『北京の日』上巻(昭一五・二・一〇)には、『才人林語堂の中国解剖は日本人の中国認識大いに資するものであることは論をまたぬ。その意味でこの小説は小説としてではなく、隣邦の民衆との握手のための理解を助ける好著であらう』(六面)という鶴田知也の文章が添えられている。
- (14) 谷崎の反応については、西原大輔「谷崎潤一郎とオリエンタリズム 大正日本の中国幻想」(平一五・七、中央公論新社)、
- 宮内淳子『谷崎潤一郎 異境往還』(平三・一、国書刊行会) 参照。
- (15) ヘルマン・ス・テオ／佐藤ロスベアグ・ナナ訳「翻訳者、声と価値」(佐藤ロスベアグ・ナナ編『トランスレーション・スタディーズ』平二三・一〇、みずす書房)、四頁。

※本研究は科研費・若手研究(B)(23720103)の助成を受けたものである。